

SDGs×ESD レポート

Vol.10

ESDは（Education for Sustainable Development）略称で「未来を変える人づくり」を意味します。

発行：NPO 法人持続可能な開発のための教育推進会議（ESD-J）

2021年度は全国センターの運営業務の一部、情報収集・発信業務を請け負うこととなりました。（公財）日本環境協会と協力し、ESD推進ネットワークの一層の強化に向けた活動、ESD活動支援センターのプレゼンスの強化と、日本各地におけるESD/SDGsの実践の深化を目指します。情報収集・発信業務の実施にあたり、会員の皆様から全国発信したい地域のESD実践の好事例や有用な教材・プログラム・ESD/SDGsに関する学習機会を提供している場・施設などの情報提供をお願いいたします！



2021年度ESD-J通常総会 2021年6月19日（土） 事務局長 横田 美保

今年度も通常総会はオンラインで開催し、33名が全国から参加してくださいました。昨年度からESD-Jの組織基盤の強化として、新理事を中心に中長期計画の策定、組織体制の見直しを行っていることを説明いたしました。ESD推進におけるESD-Jの役割の明確化と成果の可視化を行い、人づくりを通じた持続可能な社会の構築に一層寄与したいと考えています。またメールでご案内いたしました通り、ESD for 2030を見据えた「2030年に向けたESD-J活動計画」の策定作業には会員の皆様のご助言をいただき、より良い活動計画を共に創り上げていきたいと考えています。8月末の完成を目指し、会員の皆様からご提案を頂く機会を設けておりますので、是非ご意見をお寄せいただけますと幸いです。

※総会資料・議事録は当団体ウェブサイト「情報公開ページ」にてご覧になれます。 (<https://bit.ly/36H6Cwa>)



車座トーク実施報告 理事 鈴木 克徳

6月19日15:00-17:00にかけて、車座トークが開かれました。講師、事務局を含めて86名の参加者でした。

<第1部「ESDをめぐる最新の動向」>

文部科学省国際統括官付国際戦略企画官の石田善顕さんから話をいただきました。アンケート結果によれば、「大変満足」から「とても不満」までの6段階評価のうち、上位2つで67.2%、3つでは89.7%と高い評価でした。

◆ESDに関するユネスコ世界会議

・日本は、萩生田大臣が冒頭の閣僚級ラウンドテーブルで我が国の取り組みを紹介する等、会議に大きく貢献しました。
・最終日にベルリン宣言が採択されました。

前文、約束、今後の対応という3部構成で、ESDがSDGsの全ての目標達成に貢献することを再確認し、また各国の全ての教育段階でESDを実施すること、教員の能力構築を進めること等を強調しました。会議からの重要なメッセージは、「今こそ行動の時」というものです。

◆第2期ESD国内実施計画

・ESDはSDGsの達成に貢献するものであり、そのための社会の担い手を育成すること、多様なステークホルダー間のパートナーシップ、情報の交流・共有の促進を重視しています。
・5つの優先行動分野別の施策を説明、特に、ユースのエンパワーメントと参加の促進を強調しました。



◆その他

・ESD推進のための手引きを作成した旨、ユネスコスクール推進に向けた新しい方針を示した旨を説明していただきました。

<第2部：「気候変動問題について考える」>

認定NPO法人気候ネットワークの国際ディレクターである平田仁子さんから、「気候変動の危機に挑むために」と題して気候変動問題についてのお話をいただきました。アンケート結果によれば、「大変満足」から「とても不満」までの6段階評価のうち、上位2つで89.7%と大変高い評価でした。なお、平田さんは、この度、環境のノーベル賞といわれる「ゴールドマン環境賞」を受賞されました。



◆気候変動の現状

・世界のCO2排出量は増え続けている。地球の平均気温は産業革命前から1.3℃ほど上昇しました。
・2015年に合意されたパリ協定では気温上昇を2.0℃、できれば1.5℃以内に抑えることを合意しました。そのため、今世紀後半に世界全体の温室効果ガス排出を実質ゼロにすることを目指しています。
・2018年にIPCCによる1.5℃特別報告書が公表され、1.5℃でも大きな被害があり、2℃では極めて深刻な影響があることが明らかになりました。早ければ2030年に1.5℃上昇する可能性があり、1.5℃以内に抑制するためには2030年に

CO2排出量を45%削減し、2050年に実質ゼロにすることが必要と示唆されました。

・国連事務総長は、各国の行動強化を要請しています。その中で、新規の石炭火力は全面的に中止すべき、先進国は2030年までに、世界全体で2040年までに、石炭火力を全廃すべきと強調しました。

◆日本の動き

・近年の6年間は温室効果ガス（GHG）排出量が減少傾向にあります。但し2050年ゼロを達成するためには、まだ極めて大きなギャップがあります。

・石炭火力は国内で最大のCO2排出源。既に多くの施設が稼働しているだけでなく、今後も新規建設の予定があります。日本は、世界の方向性に完全に逆行しています。

◆気候変動教育のあり方

・教育現場では地球温暖化に関する知識は教えられています。

また、小まめな省エネ等のエコ活動に取り組んでいますが、気候変動問題はそのような活動だけでは解決できません。社会の仕組みを根幹から変えることが必要であり、自らが変化の担い手であることを認識することが重要です。

・世界的にも日本国内でも若者の活動が活発化しつつありますが、日本の場合には、普通の学生には広がっていない様に感じられます。

・この10年間の行動で1.5℃目標の達成の成否が決まります。「見過ごさず、他人任せにせず、希望を持ち、自らの力を信じ、選びたい未来を実現するために社会システムの変化に向けて行動する」人材育成が求められています。そのような人材育成に向けてESD関係者と連携したいです。

閉会挨拶：ESD-J阿部 治代表理事から閉会挨拶が行われました。

（気候ネットワーク：<https://www.kiconet.org/>）



「SDGs を見据えた人づくり～ESD for 2030～」 コロナ時代の持続可能な社会をどう創るかのための人材育成

第1回、第2回、第3回を
報告します！

★各回オンラインセミナーの発表資料は当団体ウェブサイトからダウンロードが可能です★

第1回 4月24日（土） 参加者 15名 「キックオフミーティング」

◆講師：理事 小金澤 孝昭、鈴木 克徳、福井 光彦、鳥屋尾 健
セミナーの前半は2020年度の5回のセミナーの要点と課題を共有しました。後半は2021年度のオンラインセミナーで取り上げて欲しいテーマや期待等について参加者の皆様と意見交換をしました。ご意見の一部を紹介します。

●地域と学校の連携の事例は沢山あるけれど、事例や知見が十分に共有されていないので、広めていくことが必要であるとともに、表層的な話だけでなく、物事の仕組みまで分かるような深みを持たせて欲しい。

●現在、小中学校では、ESD/SDGsに取り組んでいるところが多いので、幼児期からESDの学びをすることが重要ではないか。原体験を通じて、社会や日常に活かす力が身に付けば、



将来の持続可能な社会を作る担い手となり、これは企業・社会にとって必須な人材となる。

●従来型の「教員が教える」というスタイルから「子どもたちが自発的に学ぶ」というスタイルに変えていくことが重要であり、オンラインセミナーもその点を意識した構成にすることが必要ではないか。

第2回 5月22日（土） 参加者 33名 「自治体の地域づくりのSDGs+ESD 実践」

◆ファシリテーター：ESD-J 理事 小金澤 孝昭
「世界農業遺産を活用した持続可能な地域農業による地域づくり」

大崎市産業経済部世界農業遺産推進課・高橋 直樹課長

大崎市の世界農業遺産を核とした市民教育、地域の持続性を促すための様々な活動の実践を紹介していただきました。農業が育む暮らし・文化・生物多様性を「活用から考える保全」として捉え、『守るために活かす』アクションを起こすことに重きを置く点が特徴です。行政、教育機関、農家、市民、そして企業等が連携し、地元の資源を守る価値があることを学び、その地域資源を活かした魅力の発



信＝共有を対外的に行うことで、外部の方たちにもその魅力を共感してもらい、資源・環境の保全・活用への参画を促しています。

参加者からは、地域の資源・環境を守るための取り組み例や、教育現場との協働についての話が非常に参考になりましたという感想等が寄せられました。

「社の都の市民環境教育・学習推進会議のSDGs+ESDの取り組み」

仙台市環境共生課：齋藤 雅晃さん

齋藤さんからは、FEEL Sendai が実践している環境教育・学習について、特に杜々かんきょうレスキュー隊（環境に配慮した行動をとれる人材育成）についてご説明いただきました。仙台市内の特色ある地域や自然環境をフィールドにした環境学習プログラムをNPOが作成・実践する取り組みです。



FEEL Sendai 委員：柳沼 真理さん

柳沼さんからは、幼稚園、小学校、大学生を対象に行った具体的な環境教育・学習の事例と、活動を通じて伝えたい思いをお話いただきました。

参加者からは、NPOと行政（仙台市）の取り組みが持続していることが素晴らしい、事務局担当者やNPO代表が、それぞれの立場から実践について報告してくださったことで、事業の全体像がよく理解できたという感想等が寄せられました。



第3回 6月26日（土）参加者53名 「プラスチックごみ問題とSDGs/ESD」

まず始めに福井理事より、マスコミ報道の情報を基にしたプラスチックを巡るグローバルな問題・その規制例、そしてプラスチックを削減する企業の取り組みなど基本的な情報を紹介しました。

「我が国におけるプラスチック資源循環施策の動向」 環境省環境再生・資源循環局総務課リサイクル推進室長・ 平尾 禎秀さん

日本は2019年のG20議長国として、各国が連携して効果的に対策が促進される具体的な取組を、「海洋プラスチックごみ対策アクションプラン」として取りまとめました。今後の我が国の方針としては、製品の設計からプラスチック廃棄物の処理までのライフサイクル全般に関わるあらゆる主体におけるプラスチック資源循環等の取り組み（3R+Renewable）を促進するための措置を講じていくこととし、循環型の経済システムへの移行を加速していきます。そのための「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」が今年6月11日に公布され、施行に必要な事項については今夏にも検討されることとなっています。



「サントリーグループのプラスチック基本方針」 サントリーホールディングス株式会社コーポレートサステナビリティ推進本部・内貴 研二さん

ペットボトルリサイクルの歴史・仕組み、そして日本政府の環境基本方針・プラスチック資源循環戦略を踏まえたサントリーグループ「プラスチック基本方針」について以下の4点をご説明いただきました。



①化石由来原料の新規使用ゼロの実現に向けた取り組み、

②ペットボトル軽量化の取り組み、③素材領域におけるイノベーションの積極投資、④意識醸成と社会啓発です。プラスチック製容器包装が有用な機能を保持しつつも、地球環境へネガティブな影響を与えないよう、行政・企業・市民団体等、多様なステークホルダーが協力し、持続可能な社会に向けて取り組むことが必要というメッセージが印象的でした。

福井理事のコメント：プラスチックごみに関する課題は、リサイクルをめぐる課題や海洋投棄の問題、マイクロプラスチックの問題など多岐にわたっています。今回のセミナーでは環境省とサントリーホールディングスの方をお招きし、環境省の施策や新しい法案、またサントリーグループの取り組みなどを説明いただき、参加者と活発な議論を行いました。

参加者からも数多くの質問意見が出されましたが、こうした議論を通じ、プラスチックごみに関する問題の解決には、特に消費者、市民の意識と行動がカギを握ること、またそのためにESDが重要であることを改めて認識しました。「認識から行動へ」正しく状況を認識し、そして「ほかの方へ情報を伝える事」や「より良き商品を購入する」なども含め、一人一人が行動に移していくことが期待されていると感じました。



お知らせ



次回オンラインセミナーのご案内

第5回「ESD×持続可能な消費と生産」

- 日時：8月28日（土）13:00-15:00
- 講師：ESD-J理事 下村 委津子

今回は、私たち消費者・生活者が持続可能な社会を創っていく主体者として何ができるのか、学校教育の現場で児童・生徒や学生へどのような学びの場を提供してきたのかという実践報告を踏まえ、皆さんとディスカッションしたいと思います。是非ご参加ください！

- お申し込み・詳細はWEBサイトをご覧ください。
(<https://www.esd-j.org/news/6461>)

岡山ESDコーディネーター研修の企画・運営

岡山地域「持続可能な開発のための教育」推進協議会（岡山市市民協働局市民協働部SDGs・ESD推進課）より業務委託され、今年度も岡山ESDコーディネーター養成研修の企画・運営を行うこととなりました。今年度で7年目となる本研修は、「岡山ESDプロジェクト」で重点取組分野に掲げている「人材育成」の一環として行われます。

今年度は～SDGsを視野に入れた地域づくりのために～というタイトルで、11月中旬～1月中旬にかけて実施され、昨年と同様に各参加者が企画書の作成を行う実践的な研修です。個別相談会では、講師からのきめ細やかなアドバイスが受けられます。参加者の募集が開始されましたらご案内いたします。

第1回「わくわく自然探検！」～様々な生きものとの出会い～ 後藤 奈穂美



- 日時：2021年7月11日（日）10:00～14:30
- 場所：千葉県・谷当「堂谷津の里」周辺田んぼと野原
- 参加者：13名(うち子ども4名(昨年のイベント参加リピーター3名)、大人2名、スタッフ4名、講師3名)
- 共催：谷当里山計画NPO法人バランス21
- 協力：「わたしの田舎 谷当工房」、
キャンノンマーケティングジャパン、パブリック・リソース財団



天気予報は雨で心配しましたが、昨年に引き続き「堂谷津の里」で生きものと触れ合うプログラムを開催することが出来ました。連日の大雨で関東圏の水害が報じられ、緊急事態宣言の再発令が決まる中、積極的な呼びかけができず、加えて直前の参加キャンセルもあり、参加者6名の小規模での開催となりました。

事務局より短い開会の挨拶の後、講師の晝間初枝さんを中心に荘子淑子さん、佐藤聡子さんの3名による堂谷津の里の自然探検プログラムが行われました。

最初に、ヘビやスズメバチに出会っても、生きものは臆病なのでこちらから攻撃しなければ逃げていくことを教えて頂きました。午前中は「田んぼの生きものビンゴ」というマス目に生きものが描かれたカードを一人ずつ持ち、自由に生きものを探し、見つけた生きものをチェックするゲームをしました。自由時間は30分ごとに区切り、テントに集合して生きもの探しの結果をチェックすると同時に、こまめに給水時間を設けました。休憩時には、足下に茂るオオバコを使って昔ながらの「オオバコ相撲」を楽しみました。

参加者は早朝から活動しているため、11時過ぎに早めの昼食休憩をとりました。小さな畑に人数分のキュウリがあると、子ども達に野菜の収穫体験もさせて頂きました。収穫したての新鮮なキュウリを川の水で冷やして直ぐ味わって欲しいという大人の思惑とは裏腹に、子どもはお土産に持って帰ると大層にしまい、誰一人その場で食べませんでした。



昼食後は、生きものの捕獲を楽しみました。たも網や捕虫網をめいめい手に持って、三々五々散っていきました。約束事はただ一つ、大人の見える範囲にすること。中央の台に置いたアクリル容器や虫カゴに、次々に捕獲した生きものが集まりました。アカガエル、ザリガニ、オタマジャクシ、ヤゴ、カワニナ、チョウ、トンボ、カマキリ、蜘蛛、バッタ等、子ども達の人気No.1は、ザリガニでした。しかし、ザリガニは田んぼにとって良くないことを晝間さんから教えていただき、子ども達は驚きました。残念ながらカブト虫の時期には早かったようで、樹液の出る木にはカナブンばかりが集まっていました。

捕獲した生きものの生態や特徴を、ひとつひとつ晝間さんから解説して頂いた後、捕まえた生きものは、すべて元の場所へ放ちました。そして、生きものが書いてあるカードを子どもたちなりに考えながら食物連鎖の関係に並べて、生態系ピラミッドを作りました。解散までの最後の自由時間は、林の中のハンモックで遊ぶ人、もう一度、田んぼに入る人、疲れて休憩する人、それぞれ自由に過ごしました。



最後にお土産のエコバッグを配って解散しました。誰も熱中症にもならず、奇跡的に雨にも降られず、恵まれた1日でした。アンケートの結果、皆、異口同音に楽しかったという感想を述べており、全員が次回も参加したいと回答しました。プログラムの詳細・写真はウェブサイトに掲載予定です。



◆編集後記

2021年度未来につなぐふるさと基金では、9月にサステナブルなコーヒー、10月に安全な食と地域づくり、11月に国産小麦をテーマにしたイベントを企画しています。お楽しみに！また、ESD-JのウェブサイトにてESDイベントカレンダーを公開しました。是非ご活用ください。

(リンク：<https://www.esd-j.org/activity/eventcal>)



LINEアカウント開設しました！

特定非営利活動法人持続可能な開発のための教育推進会議

〒116-0013 東京都荒川区西日暮里 5-38-5 日能研ビル 201 T:03-5834-2061 F:03-5834-2062

会員募集中：正会員（10,000円）、準会員（3,000円）詳しくはWEBサイトをご覧ください

